

赤面デコラティエ

古川学園中学校 2年 向井 陸

ちよろちよろと流れる用水路のブロックに腰かけて、僕は雑草をむしっていた。

【ああ、僕はもう終わりだ。恥ずかしくて、明日から学校に行くことはできない】

絶望し、ため息をつきながら、むしられて流されていく草をいつまでも眺めていた。どのくらい時間がたったのだろうか。僕はふと背後に誰かの気配を感じ、身を固くしながら、ゆっくりと見上げた。スーツ姿の男だった。クラスメイトじゃなかったことに安心したが、同時に、不安になった。この辺で見かけない顔だ。不審者にしてはかなり爽やかだ。

「だ、だれ？」

「そんなに警戒しないでよ。怪しいものじゃないから。あ、自分で言うって怪しいか。ははは」

笑いながら、男も僕の隣に腰かける。

「僕になにか用ですか？」

「悩みがあります、と背中に書いてあるよ。よければ話聞くんよ」

「知らない人と話をしちゃいけないと言われているので」

「いいから話してごらん。きつと役に立てるよ。さては彼女に振られたか。」

「そんなんじゃないやありません。彼女なんていません。いや…今日、教室で…」

「教室で？」

「教室で、授業中おならしちゃったんです。しかもそれが爆音で。」

キョトンとした男が、弾けるように笑い出した。僕はむっとして、

「笑えないんです。キャラ的に。もう学校に行けませんよ。」

「ははは、ごめん。おならね。馬鹿にして悪かったよ。まじめな中学生には切実な悩みかもね。」

男はポケットから紙片を取り出して、僕に握らせた。

「思い出デコレーション 招待券？ なんですか、これ。」

「まあ行ってみなよ。行けばわかるから。」

男は、僕の肩をぽんぽん、と叩き、爽やかに帰っていった。

僕は、しげしげと招待券を眺め、悩んだ。【うーん、このまま家に帰るのも気が乗らないし、行ってみるか。場所は、ニコニコ薬局だとすぐそこだ。】

僕はニコニコ薬局の前で、不思議な気持ちになった。地図には、ニコニコ薬局の入口に置いてあるマスケットのケロ太郎の後ろに五歩、ジャンプ五回と書かれていたからだ。

【なんだそりゃ。】誰も見ていないことを確認して、それを実行した。

目を開けると、僕は明るい小部屋のカウンターの前にいた。ぼつちやりとしたおばさんが、ニコニコして「いらっしやい。ご紹介ね。」と言った。

「えっ、なんですかここ？」僕はチケットをカウンターに置いて、がらんとした部屋を見回した。夢なら夢でよい。でもせつかくなら甘いものが食べたかった。

「当店は過去の思い出を装飾する専門店で、僕は理解ができない。おぼさんはごめんというジエスチャーをして、言い直した。

「簡単に言うと、過去の悩みに、生クリームとかフルーツとかデコレーションして豪華にしちゃおうってこと。具体的に言うと、君のような赤面系の悩みには、お笑いデコレーションってこと。」
「ちよつと何言ってるかわかりません。」

おぼさんは、まあ、いいから、いいから、というジエスチャーで僕を制した。

「百聞は一見にしかず。さあ、行つてらっしゃい。」とハンドベルを勢いよく鳴らした。耳がわんわんと反響して僕は目を閉じた。

「ん？」気が付くと、授業中だった。日時を見て、時間が戻っていることを確信した。窓際に座っていた女子が、外にカエルがいると騒いでいた。

【あれ？カエルとか、こんな場面あったっけ？】と一瞬思ったが、今にも肛門が爆発しそうで、それどころではなかった。僕は冷汗をかいた。

【せ、せめて1分前に戻してくれたら……も、もうだめだ。】そして、予定通り爆音のおならが出て、僕はがつくりと肩を落とした。やっぱり過去は変えられないんだ。なんなんだ、ひどすぎる。

すると、先生が、「なんだあ？教室にもカエルがいるな」と言った。それを機に、みんなが笑い出し、クラスでも人気者のタカシ君と、タイチ君も続けておならをした。女子が鼻をつまんで、でも笑いながら、僕の背中をバシッと叩いた。僕は女子に笑いかけられたことも、叩かれたことも初めてで、背中の中のジーンとした痛みを悪くなく感じた。あまりに皆が騒いだので、隣のクラスの先生が覗きに來たくらいだった。授業が終わってから、「三匹のカエル」などと茶化され、僕はおならをするフリをして、周囲を笑わせた。

放課後、僕は走つてニコニコ薬局に向かった。一秒でも早くあのおぼさんにお礼が言いたくて、なんなら抱きしめてもいいと思った。しかし、ケロ太郎の後ろに五歩、ジャンプ五回を実行したが、おぼさんの店には行けなかった。ポケットを探ると、封筒が出てきた。僕の名が書いてある。

「ね。うまくいったでしょう。これから赤面しちゃうようなことが起つても、これからの君なら笑つて乗り越えていける。誰か悩みを抱えている人を見つけたら、この招待券を渡してあげてね。」と書かれていた。僕は、封筒から小さな招待券をつまみ上げて、力強く領いた。